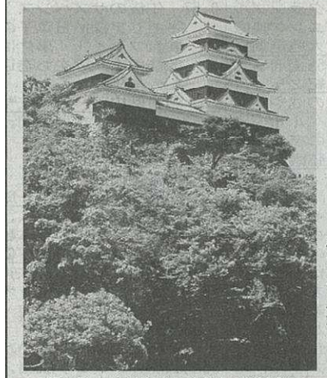
歴史建築 ホテルに変身

バリューマネジメント

歴史的建造物を活用したホテルを運営するバリューマネジメント（大阪市）は文化体験を盛り込んだホテルの新ブランドを立ち上げる。愛媛県大洲城の天守での宿泊を1泊100万円で提供したり、京都や福岡、広島などの古民家を改装したりする。地域の歴史や文化に根付いた体験型の宿泊サービスを提供し、インバウンド（訪日外国人）らを呼びこむ戦略だ。

愛媛・大洲城や京都の古民家

ご当地文化 味わって


愛媛・大洲城では1泊100万円の宿泊プランを提供する

「ストーリーを持つ歴史的建造物のポテンシャルを最大化する」。同社の他力野淳社長は11日、東京都内で記者会見し、新ブランドの立ち上げを発表した。城や古民家など歴史的建造物をホテルとして活用。地域の文化や歴史を体験できる料理やプログラムも同時に提供する。

2020年4月にも始めるのが、大洲城の天守に宿泊できるサービスだ。大洲城は築城の名手、藤堂高虎が改修に携わるなど名城として知られる。4つのやぐらは重要文化財に指定されている。宿泊できる天守は文化財の指定を受けていないが、04年に当時の雰囲気を残して再建された。

1組1泊100万円を想定する。大洲市のほか、伊予銀行、古民家再生を手がけるNOTE（ノオト、兵庫県丹波篠山市）の協力を得る。地域の旬の食材を使った料理や船遊びなどを提供。19年秋ごろから試験的に実施し、詳しい内容を決める。完全予約制で、年間30日に限る。

「オーベルジュ豊岡1925」の建物は国の登録有形文化財に指定されている

京都市内や広島県竹原市、福岡県太宰府市などにも古民家を改装したホテルを設け、それぞれの地域にちなんだプログラムを提供する。竹原市では塩業で栄えた歴史などを検討中だ。

バリューマネジメントは自治体などが歴史的建造物の保存、維持に苦労している点に着目。所有者の要望を取り入れながらホテルやレストランなどに運用している。国の登録有形文化財指定の旧兵庫県農工銀行豊岡支店を改修したホテルなどの実績がある。

今回、天守閣を生かしたホテルで協力する大洲市は「人口減に備えた新たな収益を生み出せる」（観光まちづくり課）と話すなど、建造物を保存する自治体からの期待も大きい。

古民家などを活用して高価格帯の客室に絞ったホテルやレストランなど全国50拠点まで増やす方針だ。売上高も26年までに500億円まで増やす。「『非日常性』を体験できるコンテンツを提供したい」（他力野社長）

全国的にも歴史的建造物を宿泊施設に活用する動きが活発化している。代表的な事例が17年に重要文化財に指定された「旧奈良監獄」をホテルとして活用する動きだ。星野リゾートは21年にも開業を目指しており、客室数を抑えた高級ホテルとして生まれ変わらせる。

観光庁は古民家などをホテルやレストランなどに転用する事例を20年までに200地域まで増やすとしている。特に、歴史的建造物を生かした「城泊」や「寺泊」は「欧米からの観光客に人気で、キラーコンテンツになる」（同庁）。観光と文化の関係に詳しい同志社大学政策学部の井口貢教授は「メリットは多いが、短期的な経済効果ではなく、長期的な視点に立つ必要がある」と指摘。歴史的建造物を単にホテル転用するだけでなく、文化的な体験として提供する工夫が求められる。（赤間建哉）